



木もれびの森に咲く貴重種植物

ムサシアブミ(武蔵鎧) サトイモ科

ムサシアブミの名前の由来は、花を包む仏炎苞が馬具の鎧(馬の背中から両側に吊り下げて、足元を差し込む半円形の馬具)に似ている所からのようです。

花は、3月~5月林の中やや少し湿った所に咲く多年草です。葉は、2個で3枚の小葉からなる3出複葉です。葉の間から15cmほどの花茎が伸び花をつけます。

花は、肉穂花序(ニクスイカジョ)なのですが、紫褐色で白い筋があり形が仏像の後姿に似ている「仏炎苞(ブツエンハウ)」と呼ばれる大きな苞の中に包まれているので、外からは見えないのです。秋には真赤な実をつけます。

サトイモ科には、ザゼンソウ、ミズバショウ、ウラシマソウ、テンナンシウ、等がありますが中でも、こもれびの森の中の、ムサシアブミ、ウラシマソウは増えてきました。(松浦)



ムサシアブミ



ムサシアブミの実



ウラシマソウ

木もれびの森の薬用植物 (2)

ドクダミ(ドクダミ科ドクダミ属)

ドクダミは、生薬名を十薬(ジュウヤク)といい、花期の地上部が民間で毒下しに用いられてきました。生のドクダミにはアルデヒド成分に由来する特異臭がありますが、乾燥させた生薬は無臭です。薬用植物というと漢方を思い浮かべますが、中国から伝来した漢字が日本で独自に変化していったのと同様に、中国より伝来した医学が日本で独自に発展したものが「漢方」で、漢方理論に基づいて複数の生薬を組み合わせた処方が「漢方薬」です。中国の伝統医学は「中医学」と呼び、漢方とは区別しています。これに対して、古くから庶民の間で言い伝えられ利用されてきたものを「民間薬」といい、一種類の植物を生のまま、あるいは乾燥させて用います。民間薬を大雑把に分類すると、

- ① 漢方薬に用いられる生薬の基原植物の近縁種で、同様の効果が期待されるもの
- ② 去痰、整腸、利尿、消炎など現代のOTC医薬品(市販薬)のように使う比較的作用が穏やかなもの



③ 山菜など食用にされるもの

④ 有毒成分を薬として使用したもの

昔は漢方薬は高価で庶民の手に入らなかったので、身近な植物で代用したのでしょう。有毒植物も一か八かで使ったのでしょうが、今では危険なので決して使わないで下さい。また、古くから使用され、効果がある程度評価されている生薬は、生薬製剤に使用されています。たとえば、ゴホンといえは「〇〇散」は、漢方薬ではなく生薬製剤なのです。

ドクダミは生薬としてよりも、健康茶の原料として年間約2000トン以上の需要があります。健康茶は食品規格なので、その品質は緑茶と同じようなもの、性善説に基づいて信じるしかありません。(川村)

木もれびの森の樹木

鳥が運んだ樹木たち

植物のタネ(種子)って不思議ですよ。中から芽が出て双葉になって花が咲き実がなる、小さなタネから大きなタネまでさまざまな形で自己主張しているタネ達。植物は私たちのように動く事が出来ませんが子孫を残す為に様々な工夫をしています。自然を利用したり、動物を利用したり、自らタネをとばしたりと驚くほどに沢山の方法を編み出しています。タネとなって空間を旅するのです。

今回は動物の中の鳥に注目したいと思います。タネはヒヨドリなど多くの鳥に食べられて、別の場所で糞と一緒に排泄されて根づきます。森の中には本来なかったはずの樹木を発見する事が出来ます。鳥に目立つように赤色の実を付ける樹木は沢山あります。ヒメコウゾ・コブシ・シロダモ・マンリョウ・サネカズラ・ノイバラ・カマツカ・ニシキギ・マコミ・ツリバナ・アオキ・ガマズミ・ニワトコなどなど。その次に黒、紫、黄、茶色の実をつける樹木があります。ヤマグワ・クスノキ・ヒサカキ・アカメガシワ・カラスザンショウ・サンショウ・イヌツゲ・ミズキ・クマノミズキ・キツタ・イボタノキ・トウネズミモチ・ムクノキなどなど。今回は個人の庭から運ばれたと思われる2種の常緑樹にスポットを当てます。森の中で見た事がある方が多いと思います。

カクレミノ

ウコギ科。常緑小高木、庭木として良く植栽される。夏から秋にかけて、樹皮を傷つけて出た白い樹液を黄漆と呼び家具などの塗料に用いる。雌雄同株。果実は液果で10月から11月に紫黒色に熟す。



カクレミノ



ユズリハ

ユズリハ

ユズリハ科。庭木や公園樹として植栽される。

春先に新葉が出ると前年の葉が落ちるため、譲葉(ユズリハ)と名前がつけられた。縁起物として葉を正月飾りに使う。果実は核果で11月から12月に熟し表面に粉をふいた藍黒色になる。(高橋)